

# イベリアの夜 II

峰 万里恵 (うた) ☆ 高場 将美 (ギター)



スペイン・バル *Olé*

2008年11月15日

☆ ☆  
*A noite da Ibéria*

*La noche de Iberia*

I<sup>a</sup> parte

## 1. ポルトガルの家 *Uma casa portuguesa*

詞：ヴァシュコ・ド・マトシュ・シケイラ/レイナーウド・フェレイラ  
曲：アルトゥーロ・フォンセーカ

作者たちは、アフリカ南東部の国モザンビーク（1972年までポルトガルの領土だった。現在も公用語はポルトガル語）で活動していました。この曲は同国の首都ロウレンソ・マルケシュ——現在の名前はマプト——で、1950年に、アフリカ西海岸のアンゴラ（やはりポルトガル領だった）出身の女性歌手サラ・シャヴェシュが初演。軍人のパーティでうたわれて大好評、すぐにポルトガル本国にも伝えられ大ヒットとなりました。

ポルトガルの家によく似合う、テーブルの上のパンとワイン。だれか扉をおずおずと叩く人があれば、その人はみんなといっしょにすわる。貧しいことの喜びは、この大きな富のなかにある——人に与えて、それで満足するという豊かさに。

わたしの家の貧しい心地よさのなかには、ありあまる愛情がある。窓のカーテンに当たる月光と太陽。素朴な喜びには、ほんのすこしのものだけでじゅうぶん。ただ、愛とパンとワイン、鍋で湯気を立てている緑のケールのスープ。

石灰で塗った4枚の白壁、ローズマリーのほのかな香り、庭には金色のブドウひと房、バラが2輪。青いタイルの聖ヨセフ様、春の太陽、キスの約束、わたしを待っている両腕。ここはポルトガルの家だと、だれにもわかる。まちがいなくポルトガルの家だ。

## 2. アヴェ・マリーア・ファディーシュタ *Avé Maria fadista*

詞：ガブリエーウ・ド・オリヴェイラ 曲：フランシーシュコ・ヴィアーナ

ファディーシュタ（ファドをうたう人）ということばは、19世紀なかばには、犯罪者・ならずものと同義語でした。やがてこんな偏見が消えても、社会の底辺の人間というイメージは長く残っていました。

民衆の祈りをうたう歌詞を多く作ったこのファド詩人も、とても謙虚なことばづかいです。伝統的なファドでは、まず詩があつて、そのあとで、それにふさわしいメロディを見つけてうたうのが一般的です。ただし、うたう人は、決まったメロディそのままではなく、自分だけの節まわしに変えながら語り、自由にうたっていきます。この詩を乗せた元のメロディ・ラインの作者——愛称ヴィアニーニャ（1895 - 1945）——はギターラ（ポルトガル・ギター）奏者でファドの歌手でした。

聖なるマリア様にご挨拶、神の恩寵にあふれたお方。こんなちっぽけな祈りにこめた、高くそび

える美しさ。

祝福された女たちのなかでも、選ばれたあなたのお腹から生まれた果実であり光、イエスに祝福あれ。かぎりない愛と恩寵の化身。

数々の痛み of 聖女マリア、神の母。もしファドを弾き、うたうことが罪なのならば、わたしたち罪びとたちのために許しを神に願ってください。

ファディシュタたちは、だれもかれも、運のない者ばかりです。母であり処女であるお方、わたしたちのことをお祈りください。いまでも、いつでも、そしてまた、わたしたちの死の時にも。

### 3. つかれ *Cansaço*

詞：ルイーシュ・ド・マセード 曲：ジョアキーン・カンポシュ 《ファド・タンゴ》

この曲の歌詞を書いたマセードは詩人で、1950年代に『黒い船（暗いはしけ）』のモウラオン＝フェレイラとともに「抒情主義の復活」をうたう雑誌の編集長をしていました。外交官としてパリにいたこともあり、アマリア・ロドリゲスと親交がありました。アマリアさんは、彼のこの詩をうたうために、1930年代から活動したファド歌手（本業はポルトガル国鉄勤務）カンポシュの作ったメロディを選びました。「カンポシュはファドの3大作曲家のひとり」と彼女は絶賛しています。

鏡の後ろには誰がいる？ わたしの目に、しっかりとその目をすえて。——だれか、ここを通過して、行方も知らず行ってしまったひと。その目を、

わたしの目のなかに残して。

わたしのベッドで眠っているのは誰？ わたしの夢を見てやろうとしているのは。——だれか、このベッドで死んだひと、そして遠いあちらからわたしを呼んでいる、わたしのさまざまな夢にまざりこんで。

わたしのすること、しないことのすべて。ぜんぶ、ほかの人がやってしまった。そこから来る、このわたしのつかれ。わたしのすることがすべて、わたしによってされたのではないと感じて。

### 4. ロンダ・ファディーシュタ (ファドをうたって町めぐり) *Ronda fadista*

詞：ジョアオン・リニャールシュ・バルボーザ 曲：フランシーシュコ・ヴィアーナ

作詞者は1920年代なかばから、長いあいだ、ファドの歌詞づくりに、すばらしい才能を発揮した民衆詩人です。『ギターラ・ド・ポルトガル』という、季刊のファド専門誌の編集長もしていました。

「ロンダ・ファディーシュタ」ということばは、現在では仲間が集まって、交代にそれぞれの自作の歌詞などをうたうファド・パーティを指しますが、この曲の「ロンダ」は、警官のパトロールのように夜の街をまわってゆく意味です。

ギターをもっていらっしやい。ふたりで跳ねて行きましょう、バイロ・アウトのあちこちの通りに、わたしたちの友達ファドをうたいに。

わたしはサンダルをはきましよう、そのほうが粋だから。そして心からの歌をうたいます、うるわしい月の光のもと。

楽しく、腕を組んで、夜が明ける前に、ふたり並んで行きましよう、モウラリアへうたいに。

モロ人の町を出たら、だれよりも幸せに、アルファーマへ行きましよう、そこでもファドをうたいに。

そこで、輝く太陽を晴れ渡った空に置いて、神様は祝福しながら言うでしょう——なんとファディーシュタのこのカップル！

### 5. 貧しいことは不幸ではない *Não é desgraça ser pobre*

詞：ノルベールト・ド・アラウージョ 曲：《ファド・メノール・ド・ポルト》

作詞者はジャーナリストで、リスボン市の祝日（6月）の祭のイベントを盛大にしたアイデア・マンです。歌詞づくりの才能もすばらしく、1930年代なかばから、マルシャ（リスボンの祭の行進曲で、パレードと大衆のダンスに使われる）で数々の大ヒットを出しました。

メロディは「港の短調のファド」という名前で、作者不明として伝わってきました。

貧しいことは不幸ではない。頭のおかしい女であることは不幸ではない。不幸なのはファドをもっていること、心の中に、そして口の中に。（ファドは歌のジャンルの名前であるほかに「宿命」という意味ももっています。この曲に限らずたぐさんの歌詞で、「ファド」ということばは、「歌」と「逃れられない宿命」の両方の意味をかけて使われています）

銀の小さなコインが銅貨よりも値打ちがある。貧しさはわたしたちを殺しはしない。貧しいことは不幸ではない。

先がどうなるかわからないこの人生では、幸せであるなんて小さなこと。頭のおかしい女は、なんにも感じないのだから、頭がおかしいことは不幸ではない。

生まれたとき、わたしは星をひとつ運んできた。そこには運命がしるしてあった。星を持ってきたことは不幸ではない。不幸なのはファドを持ちつづけていること。

不幸なのは、わたしたちがさまよい歩き、うた過ぎて、もう声もかすれてしまったこと。そしてファドが、かたくなに、ありつづける。心の中に、そして口の中に。

## 6. 4人のラバひき男 *Los cuatro muleros*

曲：アンダルシーア地方民謡 補作詞：フェデリーコ・ガルシーア・ロルカ

1936年にスペイン内戦の犠牲者となった——故郷グラナダで反乱軍（後に政権を取る）に処刑された——ロルカは、まず第一に詩人であり、詩的な劇作家としてもスペイン語世界に広く知られていました。そのいっぽう、子どものころは詩より音楽を愛し、少年・青年時代は優秀なピアニストであり、民俗音楽研究にも興味を持っていました。彼が採集し、ピアノ伴奏の歌曲として楽譜にした10数曲の民謡は、いまでも広く愛されています。

歌詞の一部、曲によっては全部分がロルカの創作です。ロルカの編曲はピアノの低音がひとつの音だけで、全曲の底に流れつづける神秘的なサウンド——ギターひとつでは弾けないので、ここでは変えました。すみません。

4人のラバひき男たち、4人のラバひき、ママ、水に向かってゆく。あのなかで、栗毛のラバの人が、ママ、わたしの魂を盗む。

野原には雨が降っている、ママ、わたしの愛がぬれてしまう。だれがなれるのだろう、1本の木に、ママ、葉をいっぱいつけて。

なんのために光を探しに行くの？、ママ、道を上って。だってあなたの顔からは、ママ、生きた炎が燃え上がっているのに。

## 7. レレレ *Lerele*

フラメンコの《ディーヴァ》だったローラ・フローレスのヒット曲です（1940年代）。彼女はヘレス出身のヒターナ（ジプシー女性）で、天成の歌い手で踊り手でした。

作曲者はアラゴン地方リクラ出身で、首都マドリードでフルート奏者をしながら音楽院で学び、1920年代から大衆劇場の音楽監督として活動。パリに7年間住んでいました。スペイン歌謡界屈指の大物です。歌とダンスの学校や楽譜出版社も経営。いちばん有名な曲はパソドブレのリズムで、『¡Ay!, mi sombrero アイ、ぼくの帽子』です。

わたしはソロモン王の洞窟からやってきた。ファラオの掟をもってきた。ヒターノの神がわたしに命じる、そのことばをわたしは、ヒターノ民族の歴史の記憶の中に守っている。わたしを置いて

詞：クリート 曲：ヘナーロ・モンレアル

ゆかないで、籠づくり族のヒターノ。だってわたしはあなたを愛してる、この後だれも愛さないほかに。

あなたの同族を裏切って、呪いがふりかかることのないように！ 上ではヒターノの神が、いつもヒターノ民族の貧しい者たちの愛を見守っている。鍛冶屋の炉の中で溶けて新しい金属が生まれるように、わたしの感覚の中ではひとつの愛が溶け合って形になった。

太陽とおんなじようにあなたを愛す。わたしの愛は太陽とおんなじ。アイ！ レレレレレ……

### 2<sup>a</sup> parte

## 1. ラ・タラーラ *La Tarara*

曲：アンダルシーア地方民謡 補作詞：フェデリーコ・ガルシーア・ロルカ

アルベニスのピアノ組曲『イベリア』のなかの『セビージャの聖体祭』（1906年初演）にもこのメロディが使われています。サウラ監督がアルベニスに捧げた映画『イベリア』では、それはオーケストラ編曲になっていました。歌詞の「オリーブの実から生まれた若者たち」などは、完全にロルカの表現です。その若者たちはどんな様子なのか？ 詩人本人も知りません。

なお、ここでの歌詞はフラメンコ歌手カマロンがうたったもので、少しロルカ以外の人の手も加わっているようです。

アイ、タラーラ、くるったむすめ。胴を動かす、

オリーブの実から生まれた若者たちのために。

わたしのタラーラはみどりのドレスで着飾っている。房飾りと鈴をいっぱいつけて。

タラーラは踊る、絹のドレスの長い裾（すそ）を引いて。レターマとジェルバブエナのあいだで。（レターマは日本名エニシダ。黄色い香りのいい花をつけます。噛むと、にがい味がします。ジェルバブエナは、ミント（はっか）です）

アイ、タラーラ、シー。アイ・タラーラ、ノー。アイ！ タラーラ、わたしの心のむすめ。

## 2. ラ・ニーニャ・イサベール *La Niña Isabel*

詞：アレーホ・レオン・モントーロ 曲：フワン・ソラーノ

1940年代のなかばに、フラメンコ歌謡の女性スター歌手グラシア・デ・トリアーナがヒットさせた曲だそうです。キューバとは大西洋で結ばれているアンダルシア地方の港カディスの《タンギージョ》というリズムを使っています。作曲者はアンダルシアの北隣りのエストレマドゥーラ地方カセレスの出身で、セビージャの音楽院で学び、バレエや映画の音楽も書きました。1960年に、世界的なスーパー・ヒット『エル・ポロンポンペロ』を生み出した人です。

キューバの湾に面した《汽船のカフェ》で、ニーニャ・イサベールは大人気。彼女はハバナの花だった。陸と海の人々にうたっていた。その歌からみついた悩みは、だれにも見えなかった。「ニーニャ・イサベール、うたってくれ！」——船乗りたちは叫んだ。そして褐色の花はうたう、ほとんど死んでいるように、ほとんど冷たくなっ

て……

あの《汽船のカフェ》で、もう彼女はうたわない。とあるスペインの船乗りが、ある朝彼女を連れ去った。明るい青のドレスで、彼女は海でしあわせになった。彼女の歌を殺していた、あの悩みから、もう自由になって。

アイ！ ニーニャ・イサベール。その両目にはキューバの夜がある。その唇にはバナナの蜜。

彼女を殺すひとつの愛、彼女を殺すひとつの痛み。それは海を渡ってゆく、深い青色のドレスを着て。

アイ！ ニーニャ・イサベール。水に向かうお前のため息。わたしもハバナを去ってゆく、お前の後を追って。

## 3. 黒い船〔暗いはしけ〕 *Barco negro*

詞：ダヴィード・モウラオン＝フェレイラ 曲：カコ・ヴェリョ／ピラチーニ

原曲はブラジルの歌で、作者たちはサンパウロで活動する歌手・ミュージシャンでした（1945年発表）。もとの題は「マンイ・プレータ（黒い母）」とあって、ブラジルの大農場で働いている白髪の黒い老婆が、ご主人の白い赤ん坊のお守りをしていることがうたわれています。

1955年のフランス映画『過去を持つ愛情』（原題 *Les Amants du Tage* タイジュ河の愛人たち）の1シーンで、アマリアさんがうたうために、この曲に、別の歌詞が付けられました。作詞の専門家ではなくて、詩人であるモウラオン＝フェレイラが書きました。

朝、こわかった……砂浜に横たわり、あなたに顔がみにくいと思われるのが不安で、わたしは震えながら目を覚ました。でも、あなたの目はすぐに、そんなことはないと言った。そして太陽の光が、わたしの心に刺しこんだ。

その後、わたしは見た。岩の上に、十字架。そしてあなたの船は、光の中で踊っていた。

わたしは見た、あなたの両手。嵐に吹き飛ばされないように、もう切り離されてしまった帆のあいだで、わたしになにかを告げようと振られてい

た……。

浜の老女たちは言う。あんたはもう帰ってこない。嘘だ！ 彼女たちは頭がおかしいんだ。

わたしは知っている、愛するひと、あなたはまだ出発もしなかったことを。だって、わたしのまわりのすべてが、わたしに言っている。あなたはいつも、わたしといっしょにいると。

ガラス窓に砂を打ちつける風のなかに——うたっている水の流れのなかに——消えかけている火のなかに——ベッドのぬくもりのなかに——だれもない腰掛けのなかに——わたしの胸のうちに——あなたはいつも、わたしといっしょにいる。

わたしは知っている、愛するひと、あなたはまだ出発もしなかったことを。だって、わたしのまわりのすべてが、わたしに言っている。あなたはいつも、わたしといっしょにいると。

## 4. コインブラ *Coimbra*

詞：ジョゼ・ガリャールド 曲：ラウーウ・フェラオン

コインブラは、ヨーロッパで最古の大学のひとつがあるポルトガルの都市です。レビューの台本・音楽で大活躍していたふたりが作ったこの曲は、アマリア・ロドリゲスさんが気に入ってうたったことで外国でも有名になり、1940年代の末から国際的にヒットしました。フランス語や英語で「ポルトガルの4月」という意味のタ

イトルが付いて、いわゆるムード音楽として世界のスタンダード曲でした。

ポプラ並木のコインブラ、おまえは今もなおポルトガルの愛の首都。歌の都コインブラ、わたしたちにとって、おまえは愛の泉。

コインブラこそは、夢と伝説の授業。講師は1曲の歌、月が大学。教科書はひとりの女性。合格できるのは「サウダード」と言えるようになった人だけ。

(サウダード=失ったもの、そこにはないものへの愛から生まれる、甘美な悲しみの感情をあらゆるポルトガル語、ノスタルジーと置き換えられることもあるが、そのニュアンスは他言語に翻訳不可能。ポルトガルの国民感情の根源にあり、ファドを生んだ感情だと言われている。ブラジルでは一般にサウダーヂと発音され、やはり民衆の心の底に流れている感情だと考えられている)

## 5. 花売りのジュリア Júlia Florista

詞：レオネーウ・ヴィラルー 曲：ジョアキーン・ピメンテーウ

ジュリア・フロリーシュタ（花売り女ジュリア）という芸名の歌手は、20世紀はじめの最高のファド・アーティストのひとりでした。酒場や料亭でうたうほかに、貴族の宴会やパーティにも呼ばれましたが、一生、花売りはやめませんでした（1925年没）。ギターラ（ポルトガル・ギター）をかき鳴らしながら、メランコリックにうたったそうです。うたっていないときは、うるさい男どものことばに見事な返事で切り返す、挑発的な女性だったとのこと。花を売るのもファドをうたうのも、そうでなかったら、やっていけなかったでしょう。

ジュリア・フロリーシュタは、ボヘミアンでファディーシュタだったと伝説は語る。ギターラ

のひびきに乗ってファドを生きた。花を売っていた。でもその愛は、決して売らなかった。

足にはサンダル、乱暴な歩きぶり、ジュリアが通ると、彼女の歌を聴こうとリスボンが足を止めた。空気の中に売り声、口には愛を語る歌。胸には花かごの、みごとに飾られた粹な姿。

おお、ジュリア・フロリーシュタ。わたしたちの記憶に、時が刻んだ、おまえの美しい物語。

おお、ジュリア・フロリーシュタ。おまえの声はこだまする、わたしたちのリスボンの、ボヘミアンでファディーシュタの、街々の夜ごとに。

## 6. このおかしい人生 Estranha forma de vida

詞・編曲：アマーリア・ロドリゲス 曲：アルフレード・マルスネイロ《ファド・バイラード》

ファドでは伝統的に、つねに歌詞から音楽が導かれます。この曲では、歌手のアマーリアさんが、まず詩をつくり、男性ファド歌手の最高峰とされるマルスネイロが創案した（和音をつけて楽譜に定着したのは、ポルトガル・ギター奏者の最高峰といわれるアルマンディーニョ）《ファド・バイラード》と命名されたメロディの形に乗せてうたいました。そのさい、原作の規則的なリズムは無視し、根本メロディの起伏などを単純化して、即興の節まわしが自由にできるようにしています。「改作」としてもいいでしょう。ただし、マルスネイロを、アマーリアさんは「ファド3大作曲家」と尊敬しています。

神様の意思だった——わたしが、このように思いまどいながら生きているのは。そして、すべての「アイ！」はわたしのもの、わたしのサウダードも。——神様の意思だった。

なんという変わった生きかたを、このわたしの心はもっているのだろう。なくしてしまった命で生きている、だれか運命を変える魔法の杖をあげればいいのに——なんという変わった生きかた！

ひとり立ちしている心、わたしの命令をきかない心。おまえは人々のなかで道をなくして生きている、かたくなに、血を流しながら——ひとり立ちしている心。

わたしはこれ以上おまえについていかない。止まれ、鼓動をやめなさい。どこへ行くのか知らなくせに、なぜ走りつづけることに、こだわるのだ？——わたしはもう、おまえといっしょには行かない。

## 7. ラグリマ（涙） Lágrima

詞：アマーリア・ロドリゲス 曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ

アマーリア・ロドリゲスさん（1920-99）は、いわゆる中年を過ぎたころ、重い病気で毎日ベッドで死と向かい合っていました。そのときノートに、思いつくままに詩を書いていた。それを見つけた付き添いの女性が、そこに曲をつけてうたったらどうか、と勧めました。そのことが、彼女にふたたび生きる勇気を与え、カムバックの原動力になりました。

この曲はカムバック後、作詞家としても広く認められてからのものです。

「わたしは詩人とは呼べません。でも、いつもうたっているファドの歌詞ぐらいのものは書けます」

作曲者は、彼女の最後の時期ずっと伴奏をしていたポルトガル・ギター奏者です。1970年ごろから第2ギター、80年代なかばから第1ギターで、音楽監督の役割もしていました。作曲家としては、伝統的なファドのメロディ感覚やスタイルを離れた音楽をつくっています。

悩みでいっぱいになって、わたしは横たわる。そして、もっとふえた悩みとともに起き上がる。わたしの胸に、もう居ついてしまったこんなやりかた、あなたがこれほど好きだというこんなやりかた。

絶望——わたしの絶望ゆえに、わたしの中で、わたしは刑罰を受けている。あなたがきらい——わたしは、あなたがきらいと言っている。そして夜は、あなたのことを夢を見る。

いつの日かわたしは、死んでゆくのだということをおもうとき、あなたに会えないゆえの絶望のうちに、わたしは地面にショールを広げる。そしてそのまま、まどろんでいこう。

もしもわたしにわかったら——死ぬことによってあなたが、わたしのことを泣いてくれるとわかったら、ひとしずくの涙——あなたのひとしずくの涙ゆえに、どんなにうれしく、わたしは命を捨てるだろう。

お聴きいただき ありがとうございます。  
また お目にかかるのを楽しみにしております。

うた／選曲・構成 峰 万里恵

ギター／プログラム作成 高場 将美

ホームページ:

<http://mariemine.web.fc2.com>

